

〔中国の陶磁展によせて〕

金欄手碗について

我国には金欄手の優品が豊富に伝えられており、当館にもそれが一点所蔵されています。金欄手と言え、やはり注口と把手を伴った独特な形の水注、いわゆる仙蓋瓶(せんさんびん)がよく知られていますが、当館の作品は碗です。

金欄手は明時代の嘉靖年間(1522～66)頃、景德鎮で焼造されましたが、我国では江戸時代に入って大いに賞玩され始めたようです。「金欄」という言葉が示しているようにその豪華な意匠のためでしょうか、明の赤絵のなかでは最も珍重されてきました。その作風は種類ありまして、赤絵金欄手・赤地金欄手・緑(萌黄)地金欄手・黄地金欄手・白地金欄手・瑠璃地金欄手・三彩金欄手・青花金欄手等々です。器形について見てみますと、碗・鉢・盃・香炉・瓢形又は角瓢形の大小の花生・仙蓋瓶、及び稀に見る大形の壺などと、やはりかなりの種類があります。

ここでは当館所蔵品(陳列品)に関連して、金欄手の碗に焦点を絞ってお話することに致します。金欄手の碗に限りませんが、我国にはかなりの数の遺品があり、器を飾る意匠も豊富です。当館の碗は外側は緑(萌黄)地に金泥で宝相華唐草文を表わし、見込は口縁に四方禪(よもだすき)の帯文、中央部に菊丸文をともに青花で配した

ものです(図1)。

この碗と寸法・作風ともに同類で、貴重にも五客一組で伝えられているものがあります(図2)。我国にある緑地金欄手の代表作とも言えるべきもので、重要文化財に指定されています。特に金泥文の状態が五客とも非常に良く、これらの器がいかに大切に取扱われてきたかが想像されます。前者・後者ともに高台内に青花(染付)銘があり、前者は「萬福攸同」、後者は「富貴佳器」と「富貴長命」の2種類が見られます。

これらの小碗は、多くは五客一組で向付に用いられたようですが、なかには薄茶用の茶碗に使われたものもあるそうです。以上の2件の他には、松平不味公が所持していたもので、外側が赤地五彩の蓮鷺文の金欄手碗があり、これも五客一組で伝世しています(図3)。五彩金欄手向付の中では最も華麗な作と評され、高台内にはやはり「富貴佳器」の方形銘が青花で表わされています。

同じく五客揃いで、四方禪を地文とした五彩地に金彩で牡丹文を四方に配し、高台内の銘はいずれも「萬福攸同」のもの(重要文化財、図4)、更に外側四面に周囲を緑の蓮弁で囲んだ赤玉を配し、その上に金泥牡丹文をのせ、余白には縦横に雲文を並べた作品などもあり

ます。この作品も高台内銘は「萬福攸同」です。

以上、ご紹介した金欄手碗はその寸法が、口径は11.5～13.1cm、高さは6.0～6.8cmという範囲内で、ほぼ同じと云え、しかも同形です。見込の文様についても、いずれも最初に取上げた当館所蔵のものと同じ青花文様です。従って、我国に伝えられた金欄手の碗は、外側の意匠には様々な工夫や変化を見せながらも一定した作風を示しておりまして、ある製作地の、ある一時期の作品が大量に舶載されたことを思わせます。

ところで、陶磁器に金彩を文様として焼付ける技法はすでに唐・宋時代以来行われています。景德鎮でも元代の白磁や瑠璃釉地に金彩を施した例はありますが、しかし金のもつ独特な趣を効果的にいかす迄には到っていないようです。明の前期にはその伝統が一時途絶えたのでしょうか、全く作例が知られていないようです。つまり、金彩による施文技法が、いわゆる金欄手という一つの明らかな様式として成り立つのはやはり嘉靖期に入ってからで、しかも嘉靖期の官窯ではなく、民窯において完成を見たようです。

なお、ここでどうして官窯ではそれが行われなかったのか、という疑問が生じましょう。現在のと

ころ、その間の詳しい事情は明らかにされていませんが、技術的にむつかしいという事は考えられないところから、官窯側が意識的にその使用を避けたか、あるいは官窯と民窯との間に作品様式の点であるきまりがあったのか、などということが想像されます。この問題は今後の研究の成果に待たねばならない一つの興味ある点です。

なお、金欄手が興隆したと考えられる嘉靖期には、金欄手と同じ民窯の作品として古赤絵がありますが、この両者間には意外にも性格上大きな違いがあるようです。この点について佐藤雅彦氏は、その著『中国陶磁史』(平凡社)の中で次のように述べています。「何よりの違いは、釉下に青花文をあわせ持つものがある点で、従って磁胎をおおう釉は、いわゆる染付釉の、やや青みを含む透明釉である。時として青花文のない金欄手を見るが、その場合でも染付釉を用いており、古赤絵の白濁釉とはならない。従って古赤絵のような開放的な明るさはなく、むしろいくぶん寂しげな五彩だといえるかもしれない。」

この金欄手は我国では早くから特に茶道界で珍重されてきましたが、幕末以降は京焼や九谷焼で盛んに模作が行われています。そう、そう、我家にも一点、明治金欄手大瓢形瓶がありました。(吉田宏志)

図1 緑地宝相華唐草文碗 当館蔵



図2 緑地宝相華唐草文碗(重文)



図3 五彩蓮鷺文碗



図4 五彩牡丹文碗(重文)

